eひと

自然旅 環コラム 教えて

「自然には復元力があるが、無くなれば意味がない。土地の確保がまずは重要」と話す田中章教授＝横浜市都筑区

里山バンキングや生物多様性オフセットに関する論文などは、研究室のウェブサイト（http://www.yc.tcu.ac.jp/~tanaka-semi/）で公開もしている。

東京都市大学教授

田中 章さん（57）

開発の代償に里山保全

開発で自然を壊した企業などが、代わりに別の場所の荒れた里山の保全を手助けする「里山バンキング」を提唱する東京都市大学環境創生学科の田中章教授(57)。「量」だけでなく「質」まで考えて復元するサイクルも目指している。「植林など自然を増やす事業にだけ焦点が当たることが多い。だが、自然をどれだけ減らしてしまったかという点も考える必要がある」と警鐘を鳴らす。

静岡県清水市（現静岡市）出身。少年時代、企業進出などで地元が発展する傍ら、遊び場だった海が汚れていくのを目の当たりにした。環境を壊すだけでいいのか――。田中さんは、環境保全を学ぶため上京。進学や留学などを重ねる中で、壊した自然環境を事業者の責任で周辺に復元するなどし、生態系を守る「生物多様性オフセット」に出会った。

生物多様性オフセットは、自然の豊かなある場所の価値を、どんな生き物がいて、どの範囲にどのくらいの年月生息できるかといった指標で評価し、そこを破壊した企業などはその価値に応じて自然環境を復元する責任を負う仕組み。田中さんの調査によると、2010年までに約50カ国で制度化されている。

この生物多様性オフセットを日本に導入し、手入れが行き届かなくなっていることが多い里山の保全問題も、同時に解決しようというのが里山バンキングだ。まず、運営主体は複数の里山や田畑などを「里山バンク」に登録する。それらの価値を第三者に評価してもらい、クレジットとして販売。開発事業者は、破壊した自然の代償としてクレジットを購入する仕組みになっている。

集まった資金は、里山の所有者や市民団体などによる保全や管理の費用にあてる。クレジットを購入した事業者も、企業イメージの向上につながる。環境保全の場所を見つける手間や時間の節約というメリットもあるのだという。

田中さんの研究室では、千葉市内の約6.4㌶の水田や林で里山バンキングに取り組んでいる。賛同した愛知県でも、今年、導入のための検討を始めるという。田中さんは「個々の自然をバンクというひとかたまりにすることで、広く森林を守っていける。海の保全にも広げていきたい」と話す。（山崎啓介）

◆「朝日新聞環境取材チーム」のツイッター（@asahi_kankyo）でエコの話題をつぶやき中

朝日新聞【夕刊】 2016 年 9 月 13 日